



二葉とこども

第27号



～キリスト教精神にもとづき、子どもたちの未来と地域福祉の向上に努めています～

心からの感謝をこめてありがとうございました



120年目を迎えている社会福祉法人二葉保育園にとりましては、私の理事長としての10年は短い期間になりますが、私にとりましては十分に長く、緊張感のある日々でした。この間、理事、監事、評議員の皆様はじめ職員の皆様のご協力とお支えで、無事に次期理事長にバトンタッチができ心より安堵しております。

この10年を振り返り感謝の思いで一杯でございます。第一にキリスト者として証の場が与えられたことを感謝いたします。野口幽香先生に続いて多くのキリスト者が二葉の働きを継承して下っていますが、今の時代にも悩み、苦しむ者の側近くに寄り添い、励まし、支え、生きる希望を与える二葉の使命を、私なりの役割をもって担う機会が与えられ感謝いたします。

第二にソーシャルワーカーとして、共感をもつことができたことを感謝いたします。私は長らく大学で社会福祉の担い手の養成をしてきましたが、本来自分はソーシャルワーカーであると思っております。二葉の職員の皆様が日々出合う様々な課題に向き合い、苦悩しながらも、協力し合い、成長してゆく姿をそば近く感じることができました。直接子どもたちやその家族に接することは多くはありませんでしたが、十分に臨場感のある社会福祉の実践の場に関わらせていただきましたことを感謝いたします。最後に時代の変化がよく見える場にいられたことに感謝いたします。わが国の社会福祉制度は変革の真ただ中にあります。真に国民のものになるのかどうか正念場と思っています。社会福祉法人二葉保育園の未来も含めて考える機会がありましたことを心より感謝いたします。

前理事長 遠藤 久江

小さい方達・若い方達のためにともに力を尽くしていく機会を頂いたことに感謝



この度、遠藤久江先生から理事長の任を引き継ぐこととなりまして、来年1月10日に120周年を迎える二葉保育園の長い歴史と重い責任を感じております。

私は、大学卒業後、定年退職まで神奈川県に行政職として勤務しておりました。その中で、2000年4月に児童福祉課(当時)に異動後は一貫して保健医療福祉行政に携わり、特に、通算11年超に渡り保育・少子化対策に従事しておりましたので、21世紀を迎えてからの児童福祉を地方行政の現場で目の当たりにしてまいりました。2000年は社会福祉基礎構造改革がスタートした年でもあります。その後、日本経済が低成長を基調とする時代に移行し、本格的な少子高齢社会と人口減少を迎える中で、子ど

もや子育てをする家庭にとって厳しい変化もありました。同時に、この間、社会保障制度・社会福祉政策も様々な対応を余儀なくされてきています。

そして、今日、社会や地域の変化とそれに伴うニーズに对应していくべく、常にチャレンジし続けるとともに、行政や社会に、現場に立脚した発信をしていくことが求められる中であって、二葉保育園は、職員はもとより、理事・監事・評議員をはじめ地域や教会関係など多くの方々に支えられ、その力を発揮し続けていることを実感しております。

皆様とともに、小さい方達・若い方達のために力を尽くしていく機会を頂いたことに心から感謝し、未熟ながら誠心誠意つとめてまいりますので、よろしくお願いいたします。

理事長 井上 従子^{よりこ}

今回の二葉とこども27号の共通テーマは「自立」です。
「自立」「自立支援」「成長」等を軸に、
ここ最近の当法人の各施設での取り組みを特集いたします。

二葉乳児院

「くじらホームってどんなところ？」

保育士 東島 由季

二葉乳児院のくじらホームは、建物の3階に増設した専用スペースで、2～3歳の子ども達5名が生活しています。宿直者（9時～翌10時）と日勤の職員が中心となって子どもたちを保育しています。幼稚園のお弁当、朝の味噌汁、日曜日の朝食を職員がホームで調理をしています。少人数で過ごす事で、食事・睡眠・衣服の着脱・排泄等出来るように、一人ひとり子どもたちのペースを大切にしながら、その子どもの発達に応じた自立を促しています。

2歳半を過ぎた子どもは乳児院の2階（地域子育て支援センター）で行っている「ふたばっこ」や、信濃町児童館のサークルに参加しています。担当者との愛着を築きながら、年齢に合わせた地域社会との交流も大切にしたいと考えています。

3歳児の子どもは、幼稚園に通園し、幼稚園が少し遠いので電車を利用しての通園で、雨の日は大変な時もありますが子ども達はいつも元気いっぱいです。

雨が降っていても、長靴で水たまりに入ったり、濡れた手すりにつかまって感触を楽しんだり、何でも遊びへと繋げてしまいます。毎年入園式の前は、お友達と仲良く遊べるかな、泣かないでお別れできるかなと、担当保育士をはじめホームの職員は心配しています。しかし、毎回その不安は空振りに終わり、お迎え時にはニコリ笑顔で幼稚園のお部屋から出てくれます。

幼稚園では普段できない泥遊び、色水遊びに夢中になり、お天気の日には沢山の洗濯物を持って帰ってきます。年下の子どもたちは、「〇〇ちゃんも幼稚園に行きたい!」とどんなところか興味津々。夏休みの園庭開放日や秋の運動会を見に行くと、ますます幼稚園への憧れを強くしています。秋頃になると小さい子どもを誘って、幼稚園ごっこが始まるのも恒例になっています。

子ども達が乳児院で沢山の愛情を感じて、ホームを巣立っても大きく成長していけるよう日々願っています。



「花の日」に信濃町教会から頂いた花を育てています。

二葉乳児院

「里親家庭からの自立」

院長 都留 和光

当法人に「二葉保育園自立支援・アフターケア基金」があることを知ったのは、私が、児童養護施設で働いていた時代なので、随分昔のことになります。この基金は、多くの寄付者からのご寄付と共に、二葉を退職された職員の方で退職金の一部をお寄せ下さった方た

ちの思いが詰まった大事な基金であるということを知り、これまで聞いてきました。

社会に出ていく児童養護施設の子どもたちにしてあげれば、進学であれ、就職であれ、いくらお金があっても足りないのが現状です。もちろん、先を見据えて自立に際し、アルバイトでの貯蓄を行う子もいますが、

施設にすることで自分の時間が自由に使えない場合もあります。そういった意味で、当法人に自立支援・アフターケアに使えるお金があることは、ありがたい基金です。そのような状況にある人たちに使われてこそ基金だとも考えます。

そんな基金は、従来、二葉の児童養護施設の退園者を中心に活用されてきました。しかし、二葉乳児院から2歳の時に里親宅に措置変更され、現在大学に通うT君が活用できないか、という申し出を里親支援担当の職員から受けました。事情を聞くと、大学3年次からの費用は自分のアルバイト代も含めても不足することがあります。具体的な申請書や、常務理事との面談を通じて、彼の思いを表明してもらい、実際に費用を受給する準備が整いました。返済義務が生ずる奨学金は数多くありますが、二葉の自立支援・アフターケア

基金は、給付型のものなので、返済の必要はありません。その基金から受けるお金を学費に回すことができれば、これから先迎える3年次以降は、大学での実験や実習などが多くなるT君にとっては、大いに助かることになると思います。

私は彼と話をしているうちに、二葉乳児院にいた時のことを覚えていると話してくれたことは、とてもうれしいことでした。今いる子どもも含め、これからつながっていく里親宅に行っても何かあれば、二葉が助けてくれるという良いきっかけを提供できるようにもなり、嬉しいことです。

私も退職していくときに、アフターケアも含めた、自立支援のための基金への寄付という文化を引き継ぎたいと、この度のT君の喜んでいる姿に接し改めて思ったところです。

地域子育て支援センター二葉 「子育ての第一歩を共に過ごせる場所として」

保育士 吉野 智子

一年前の5月、地域子育て支援センターに来館されたKくんのお母さんは、疲れと不安でいっぱいの様子でした。生後1か月半の小さな赤ちゃんを抱っこしてセンターのドアを開けて入ってきたお母さん、私はよくぞ来てくださいましたと心から思い、センターの中へ案内しました。お母さんは中に入り落ち着くと、せきを切ったように、赤ちゃんが泣いてばかりいて夜中もすぐ起きて、寝不足でどうにかなってしまいそうだとお話されました。私は、ひろばの先輩ママたちにこの親子を紹介しました。先輩ママたちは「うちの子も最初は寝なかったわ」、「私も疲れきってたよ」、「わけわからないよね」、と心から共感してくれました。そして「少しずつ慣れてくるよ、少しずつ長く寝るようになるよ」とお話してくれました。Kくんのお母さんもわが子より大きい赤ちゃんの様子を見て、あと数か月すればあんな風になるんだと思い、少し安心した様子でした。

その日以降、Kくんのお母さんのひろば利用が始ま

り、K君のお母さんには子育て仲間もできてきました。私たちもKくんの成長を一緒に見守りともに喜び合いました。時を見て私は、K君のお母さんに、少し楽になりましたかと尋ねてみました。Kくんのお母さんは、「あのころ私、あぶなかったですよ」と笑いながら答えてくれました。そして、「ここに来てよかった」と話してくれました。その後Kくんのお母さんは、お仕事に復帰しました。日曜日にはお父さんと3人で遊びに来てくれます。センターではお父さんたちも顔を合わせるようになり、次第に家族同士のお付き合いになり、先日は家族同士でバーベキューにも行ったそうです。

利用者の方々が、「ここは実家のような」とおっしゃってくださいます。センターは何かがあったら帰ってこられる場所、エネルギーを充電してまた再び外に向かっていける『里』のようなところです。これからも、子育ての第一歩を共に過ごせる場所として、それぞれの親子に丁寧に寄り添いながら歩んでいきたいと考えております。



自立支援コーディネーター 鈴木 章浩

「自立とは何か」この問いは、ある意味で「永遠のテーマ」と言えるのではないのでしょうか。この難題の回答へと導くための一つの手がかりが、施設退所者からのメッセージだと日頃から感じています。「施設退所直後に困ったこと」として施設退所者が伝えてきてくれることの中で、最も多いことは『孤立感・孤独感』です。社会的養護の下にある子どもたちが抱える「心の傷」は見えにくいものです。しかし、実情は「自己肯定感の低さ」、「自己表現が抑圧されてしまうこと」、「未来思考が抱けない」等の課題や辛い胸の内を抱えています。このような様子から、「自分を必要としてくれる他者がいる」、「自分の存在には意味がある」という感情や自信を得ることが困難な環境に身を置いていたであろうことが想像できます。

しかし、世の中における自立のイメージは「誰にも頼らずに生きていくこと」と捉えられがちです。この幻想は「人間は周囲に支えられて生きている」ということをわからなくさせてしまう危険性を孕んでいます。また、従来、児童養護施設において行われてきた「進路支援や退所後支援」は、狭義の意味における自立支援です。今、重要なのは、広義の意味における自立支援とは何かを私たちが理解し、子どもと共有し、子どもたちと共に実践し、検証するということではないか、

と私は感じています。「肩肘張らず、頼れる先をたくさん持つこと」は、自立において不可欠な要素です。

これまでの実践の中で、「この取り組みは、自立の根幹部分に繋がる」と言えるようになった契機がありました。それは、「芸術家による子どもたちへのアプローチ」※です。「芸術」という意味、正解も不正解もない自由な表現の場は、子どもたちにとって、かけがえのない空間、時間であることがやってみてわかりました。自立とは、「他者の存在があって、初めて成り立つ」という今まで述べてきた前提の中で、芸術を通し子どもたちに感じ取ってもらえることがたくさんあると思います。たとえば、「共同作業をすることで相手を理解する」、「自分の思っていることを表現する」これらのことは、自立支援の根幹に繋がり、施設退所者の「孤立感・孤独感」の緩和に辿り着くものであると確信しています。

いつか咲くであろう「自立の花」を想像し、「孤立の種、孤独の芽」を摘み取り、「自立の種」を蒔き、土を耕し、水をやり、陽を当てることに自立支援コーディネーターとして、これからも専念していきたいと思っています。

※「芸術家による子どもたちへのアプローチ」とは、特定非営利法人「芸術家と子どもたち」の方々がプロの現役アーティストと子どもたちの出会いの場をつくり、幼稚園・保育園・小学校・障害児施設・児童養護施設等に訪問し、身体表現や演劇、美術、音楽などを通じて子どもたちの表現活動を行ってくださり、二葉むさしが丘学園でも現在ワークショップを実施しています。



自立支援コーディネーター 小林 治

二葉学園では、本園に2ホーム、地域に点在している分園(グループホーム)が8ホーム(調布市・府中市)あり、全員で58名の児童が生活しています。その中の第2分園の屋久杉ホーム(男子高齢児)を「自立援助的ホーム」として位置付けし、児童の状況に合わせた個別的な自立支援を行ってきました。また、児童養護

施設としての集団の力も活用して、社会で生活していくための意識づけ、動機づけを積極的に行ってきました。さらに、本園の3階にあるもみじ室を使用しての自立生活訓練や、屋久杉ホームの一部屋を利用しての一人暮らし体験なども行っています。

児童養護施設に入所する児童の社会的自立は困難を伴うことが多く、社会に自立してから挫折してしまう

ような不安定な児童も多いのが実情です。在園児についても、入所以前の家庭関係や生活環境の影響から、依存性が強い、情緒的に不安定、自己管理や自己コントロールができない場合があります。それゆえ、他者へ責任転嫁したり、自己の責任で行動ができず、卒園または退園しても自立した生活を送ることが困難な状況にある児童もいます。

そこで、入所している児童の支援方針を作成していく際に児童の意向の確認を行うことや、自立の定義(精神的自立・身体的自立・社会的自立・経済的自立等)を念頭に入れながら支援方針を作成し、日々の児童の支援を行っています。

今年度4月1日に開所した第8分園のさくらホーム

は幼児から高校3年生まで生活しています。一人ひとりに合った進路を決定していくことが重要となってくるので、高校選択では全日制、定時制、通信制や単位制のことを本人へ説明しています。現在、高校3年生である児童の進路選択を考えていますが、高校進学後には、大学や短大、専門学校などへの進学(奨学金制度の活用も含む)への対応を行います。知的な障害をかかえる児童の就学相談から特別支援教育について、更には、就職などの自立支援についての進路先には多くの選択肢があります。

このように幅広い進路の中から児童一人ひとりに合った進路方針を立てて、二葉学園全体として自立(進路)支援について積極的に取り組んでいるところです。

二葉南元保育園

「連続する繋がり～保育園の自立支援」

保育士 橋爪 主税

「おはようございます。おかわりないですか?」「おはようございます。変わりなく元気です。今日もお願いします」「はい、いってらっしゃい」毎朝、当たり前のように交わされる保護者と保育士との会話。このやり取りにはたくさんの気持ちや思いが含まれています。日々のやり取りの中で、お互いの気持ちを少しずつ共有していきながら、保護者や子どもと信頼関係を築いていく積み重ねが保育園の営みです。

保育園から見た自立支援とは何かと考えた時、それは、保護者と共に子どもの成長を見守り、喜び合うことが第一であり、次に保護者の置かれている環境や状況を受け止め、必要に応じてサポートをしていくことが家庭への自立支援だと考えます。

自立とは、字で見ただけでは「自分で立つ」と言う意味にとらえられがちですが、自立は、自立をしたら終わりというゴールや目標ではなく、自立し続けるこ

とをどのように継続していくかという日々の生活の流れや、それが連続する繋がりのことだと思います。

保育園を利用している全ての保護者が、それぞれの家庭の生活を維持、継続していく中で社会とのつながりを持たれています。核家族化が進み子育てのことで一人悩むことや、仕事のこと、自分のことを抱えながら日常過ごしています。保育園での朝の何気ない保護者と保育士の会話からお互いがつながりを感じ取り、そこに生まれる信頼関係こそ、自立を支えあうことになると日頃から感じています。

そして、そのやり取りを目の当たりにしている子ども達は、その保護者と保育士との関係性を感じ、人と人とのつながりの大切さや、そこから感じる安心感を学び取る機会を得ながら成長していきます。これは、子どもたち自身の自立支援につながる大切な感覚を身に付けていく機会になっていると思います。



保育士 中村 由紀

いま、子どもたちが保育園で生活する時間は1日に平均10時間であり、0歳児から就学前までの成長期を過ごす保育園の環境・役割の大きさを改めて感じています。

二葉くすのき保育園は「家庭的雰囲気大切に、心も体もあせらずゆっくり育てることにより、子どもの人格および能力が全面発達するようにする」という保育目標があります。大人と子どもの人数だけでも家庭とは大きく異なる保育園の環境ですが、0・1・2歳児クラスは育児担当制をとり、担当保育士との親密な育児の関わりを通して子どもとの信頼関係を築いています。一人ひとりを深く理解し、育児における丁寧なかかわりにより、子どもの意思を尊重しながら、少しずつ子ども自身が「じぶんです」という意識へつながることで自立心が育つことをめざしています。何でも早く出来るようになることが良いことのように大人の側は捉えやすいのですが、子どもの今に注目し、その子のペースで成長していく過程を一緒に見守り喜ぶ合うことを保育園では大事にしています。保護者の方にとって初めての子育てはわからないことばかりであり、心の成長とともに関わりの難しさも増えてきますが、その時々の子どもの思いを汲み取りつつ、生活していく上で必要なことを子どもが理解できるように伝えていくことは、子どもを取り巻くすべての大人の役割

だと感じています。

保育園は子どもにとって小さな社会であり、学びにつながるたくさんの経験ができます。「自分の思いを伝えること」「相手の思いを知ること」「葛藤しながらも相手の意図や気持ちに寄り添うこと」「子ども同士で考え合い解決していこうとすること」「状況に応じた振る舞いを身につけること」など、お互いの経験と学びの積み重ねで育ち合える貴重な環境です。

子どもの育ちにとって家庭が基本となりますので、家庭での育ちを基盤に、子どもがその子らしく成長していく過程を、保育園も共有していくことが不可欠と考えています。

だからこそ、子どもを真ん中に、保護者の抱える不安・悩み・迷い・困難な状況にその都度寄り添い、安心して子育てしていけるよう支援していきたいと思っています。



児童指導員 金崎 慎太郎

自立援助ホーム職員として数年が経過し、日々「青少年の自立」を目的とし仕事をしてきました。率直な感想としては、「自立するということは困難で、とても難しい」という思いです。

「自立」というキーワードは福祉の世界、特に児童養護施設・自立援助ホームなどの施設では耳にしない日は無いほどに言語的地位を確立しています。

「自立の準備」をして、生活・就労をスタートさせるための支援だけでも容易ではありませんが、それ以上に困難な事とは、「自立の継続」だと考えています。

自立援助ホームにおいての自立と就労は切り離して考えることはできません。福祉の世界に限らず、世の中の基本として「人は生きるために仕事をし続ける」必要性を体験して理解することが大切だと思います。

トリノス退居者も10名を超えましたが、自立の準備の完了後に自立を継続させることの難しさに退居者自身、職員一同も直面しているところです。

今年度より、就労の定着継続支援のために、また退

居者のケア充実のためにジョブ・トレーナー（以下、JT）という役割がトリノスにも設けられました。今後は、このJTによる取組みを通じて、今までよりもより手厚い支援を行うことができると思います。ただし、自立援助ホーム内における「インケア」としての支援と実際に社会のなかで自立生活を継続することには大きな差があります。自立後に退居者はこのことを経験、体験して自分で気付くことが大いに重要になります。

また、支援者である私たちも自立を支援するにあたり、利用者にとっては長い人生の中で自立のスタートラインに立つことに過ぎないことをより理解しなければなりません。支援者の視点から施設を退居することがゴールではなく、利用者にとっては、それこそが自立のスタートとなり、これから長い「自立の継続」をめざしてゆくこととなります。私達、支援者はスタートラインをゴールテープと間違えてはいけないと思います。走り始めた後は、いわゆる補給所的な利用の仕方を伝え、そして息長く応援をし続けることが支援者として必要になると考えています。

平成30年度 二葉支援の会にご寄付をお寄せ下さった皆様

二葉支援の会では、平成29年度から「二葉を巣立った人たちへの自立支援」に力を入れていくという目標を掲げてまいりました。多くの皆さまに、この趣旨をご理解いただいた結果、総額5,020,200円ものご寄付を頂き集まりました。本当にありがとうございました。

なお、頂いたご寄付は次のように活用していく予定です。①自立援助ホームトリノスの運営費補助として100万円、②二葉奨学金に120万円(奨学生は2名)、③(社福)二葉学園自立支援・アフターケア基金への積み立て金として、100万円、④各施設の具体的な使途に総額150万円(詳細は以下)、残りの約30万円は、法人のリーフレットや二葉とこどもの印刷費、郵送費等事務費等に充当させていただきます。

○二葉むさしが丘学園	ファミリーホーム 準備金	500,000円
○二葉南元保育園	おもちゃの買い替え	500,000円
○二葉くすのき保育園	施設修繕費	500,000円

ご寄付をお寄せ下さった皆様(敬称略)

愛知 芙美子	太田 清子	坂倉 綾子	高木 瑛子	野澤 理子	望月 隆文
秋山 美枝子	大野 恵子	坂本 和子	高木 みさ子	野津手 真理子	元橋 三千代
網野 武博	大湊 朋子	坂本 健	高橋 和代	橋口 英二郎	本村 浩輔
荒井 和也	岡崎 瑠美子	佐々木 静子	田口 美穂	橋本 康彦	護山 千津子
新井 美津子	奥野 弘史	佐藤 政雄	武田 康男	羽田野 恵美子	山崎 美貴子
井口 治彦・早苗	奥野 恵子	潮谷 恵夫	多田 一江	羽仁 カンタ・昌子	山田 あきこ
池田 竜平	尾崎 百合子	篠原 誠	田中 佳子	林 伸子	山田 美和子
石川 滋	押切 重洋	篠原 祥子	谷中 信一	林 聡	八幡 則子
伊豆 道子	垣内 国光	清水 純子	丹井 逸子	林 千尋	吉岡 羽菜
伊藤 陽子	笠原 勝子	清水 真一	富田 護	東山 靖子	吉澤 貞雄
稲垣 千重子	片倉 昭子	小路 慎実	中井 龍太郎	久邇 正子	学校法人 東洋英和幼稚園 母の会
乾川 日出夫	加藤 公子	菅原 慎矢	中村 恵子	福田 敏朗	東中野教会
井上 収之	亀澤 修治	杉浦 孝夫	中山 正雄	藤林 はる子	東中野教会「二葉保育園支援献金」
井上 従子	川久保 美和子	鈴木 美邦	縄田 寿克	藤原 誠	教会員有志
岩本 和雄・隆子	河津 英彦	鈴木 伶子	西川 元也・祐子	ホドツカ シゲオ	学校法人 女子学院 宗教部
宇都 榮子	木村 孝子	鈴木 結貴	西田 和子	増間 まゆみ	株式会社クロッシング・フォーラム
馬上 英実	清野 陽子	鈴木 博人	西田 葉子	真鍋 美一	盛 和子
宇留間 正佳	金城 清心	鈴木 浩之	西村 道子	宮沢 成実	有限会社 ニドインダストリアルデザ
遠藤 敦子	駒崎 幸	瀬尾 義広	西本 知代	宮本 泉	イン事務所
大島 尚子	小山 和子	関 幸子	野口 三重子	冥賀 令	ニチバン株式会社

支援の会への感謝

おかげ様で子どもの住居環境が整いました

今年4月から、二葉むさしが丘学園では国の「小規模住居型児童養育事業」である、法人型のファミリーホーム「しろやま」を開設しました。「しろやま」は定員が6名で、昨年示された国の考え方に基づいて、地域の中でより家庭に近い生活を目指して、養育者の家族とともに暮らしともに豊かな経験をすることを目的としています。開設以来、地域の方のご理解もいただきながら、子どもたちと、二葉むさしが丘学園で働いてきた職員夫婦が養育者としてその家族と一緒に生活しています。

「しろやま」の開設にあたっては、家具、家電製品などの準備のため、「二葉支援の会」をはじめとした多くの皆様よりご寄付をいただき、児童居室のベッドやテレビの購入などに使わせていただきました。おかげさまで現在は、高校2年生、中学2年生、中学1年生の3名の子どもたちが、より地域に近いところで、それぞれの暮らしを始めることが出来ました。

新しい部屋と新しいベッドでの新しい生活に、子どもたちもわくわくしながら毎日を過ごすことがで

きています。

これからまだまだ新しい子どもたちが増えていきますが、不安を胸にいっぱい抱えた子どもたちが、いつ来てもすぐに安心して生活が始められる準備ができたことに、心より感謝を申し上げます。私たち職員も、生活の安心安全をしっかりと守りながら、皆様のお気持ちを、子どもたちの成長につなげていけるよう、また、それぞれの夢多き未来の実現の一助となれるよう頑張っていきたいと思っています。

二葉むさしが丘学園 施設長 菅原 淳史



「二葉支援の会」への寄付について

二葉保育園では、「二葉支援の会」が中心となって、法人内の各施設の事業や組織運営を支えていく活動を行っています。ご寄付は、年一口5,000円以上をお願いしておりますが、金額は問わず、一人でも多くの方にご支援を頂きたいと思っております。ご入会・ご支援頂ける方はぜひ当法人本部までご連絡ください。

★当法人へのご寄付は社会福祉事業への寄付として確定申告をして頂くと税制上の優遇措置(寄付金控除)が受けられます。詳しくは当法人本部までお問い合わせ下さい。

「二葉支援の会」 お問い合わせ

社会福祉法人二葉保育園 法人本部

電話 **03-3341-1205** (平日10時～17時)

E-mail **info@futaba-yuka.or.jp**

郵便振替

口座番号：00120-2-30321

口座名義：社会福祉法人二葉保育園

銀行振込

三菱東京UFJ銀行 支店名：四谷支店

口座番号：普通0506208

口座名義：(福祉)二葉保育園

クレジットカード

社会福祉法人二葉保育園ホームページの「寄付のお願い」ページからお手続き頂けます。



社会福祉法人 二葉保育園

野口幽香賞 ～ご応募お待ちしております～

● 主 旨

社会福祉法人二葉保育園（以下「法人」とする）は創設者、野口幽香の偉業を顕彰し、その理念と実践がながく後世に継承されることを祈念し、創立120周年を記念して「野口幽香賞」を創設しました。

広く児童福祉事業等で顕著な活動をしている個人または団体を顕彰します。

● 対 象

乳幼児とその家族の福祉増進に貢献する実践及び調査・研究をしている、団体もしくは個人とします。

● 賞

「野口幽香賞」賞状 副賞：50万円、記念品

● 応募方法

応募期間 2019年5月1日から2019年10月31日

詳細はHPをご覧ください。



社会福祉法人 二葉保育園 概要

法人本部

所在地：〒160-0012 東京都新宿区南元町4番地

設立：1900年(明治33年)

理事長：井上 従子

常務理事：武藤 素明

理事：河津 英彦、押切 重洋、福田 敏朗、都留 和光、町田 とし江

評議員：宮沢 成実、鈴木 美邦、磯谷 文明、市東 和子、吉村 晴美、金子 恵美、潮谷 恵美、貫名 通生、浦上 充

監事：園 武友、乾川 日出夫

職員：4名

二葉乳児院・地域子育て支援センター二葉

院長 都留 和光

児童定員：40名 職員：90名

住所：〒160-0012 東京都新宿区南元町4番地

二葉学園

統括園長：武藤 素明 園長：小倉 要

児童定員：52名(グループホーム8ヶ所を含む)

職員：73名

住所 本園：〒182-0035

東京都調布市上石原2-17-7

二葉南元保育園

園長：町田 とし江

児童定員：110名 専門型一時保育：10名 職員：52名

住所 本園：〒160-0012 東京都新宿区南元町4番地

二葉くすのき保育園

園長：森本 裕美

児童定員：100名 職員：39名

住所：〒182-0022

東京都調布市国領町3-8-15 都営くすのきアパート1号棟

二葉むさしが丘学園

統括園長：武藤 素明 園長：菅原 淳史

児童定員 本園：60名(一時保護6名を含む)

グループホーム：18名、職員：65名

ファミリーホーム：6名、職員：2名

住所 本園：〒187-0011 東京都小平市鈴木町1-62-1

自立援助ホーム トリノス

統括園長：武藤 素明 ホーム長：渡辺 剛史

児童定員(男子)：6名 職員：4名

住所：〒191-0021 東京都日野市石田1-28-10